四月の御教え

人を殺さないと言っても、心で人を殺すのが重大な罪である。人を鉄砲でうったり刀で切ったりしなければ、私は人を殺していないと言うが、それは目に見える。目に見えない心で人を殺すことが多い。それが神の心にかなわないことになる。目に見えて殺すのは、お上があってそれぞれの仕置きにあうが、心で殺すのは神がおとがめになる。心で殺すとは、病人でも、これは大病でとても助からないなどと言うが、これが心で殺すことになる。人間の心では、助かるか助からないか、わかりはしないであろう。また、あの人は死ねばよいと言ったりもする。それがみな心で殺すのである。そうではなく、どうぞ向こうが改心しますようにと、神に祈念してあげよ。

……「天地は語る」第七十五条……

解説

「心で人を殺すのは重大な罪である」との御理解でありますが、実際に殺すのとは違って、心で殺すのは、実害がないから、いいのではないか、と思うかもしれません。しかし信心する者にとっては、それは神様がお許しにならず、死ねばよい、と思ったりせず、相手が改心するように願ってあげよ、との思し召しであります。だが「この人は大病でとても助からないなどと言うのも心で殺すことになる」とは、どうしてなのでしょう。それは、人間の心では助かるか助からないかは、分からない、とのお言葉から察するに「人は、神様の領域にまで踏み込まず、謙虚に人としての領分を心得て、ただひたすらお礼とお詫びを基として一心に神に願って御蔭を頂けよ」との御思いと思わされます。